富山市の新しい学校図書館を見学してきました。

富山市立山田図書館

　市町村合併後、旧山田村に各１校あった小学校と中学校が隣接して新築され、小学校棟と中学校棟の間の中二階に市立図書館の地域館が設置されました。図書館の玄関は山田中学校生徒玄関のすぐ横です。
　岩瀬小学校と同じく、公共図書館が学校図書館との複合化と共有化を目指した施設です。

　ガラスの扉で仕切られた閲覧室の向こう側には、小学生と中学生が一緒に食事するランチルームがあります。蔵書は７対３で、児童書がほとんどです。
　学校図書館の予算で買う本と市立図書館の予算で買う本が混在しておかれていますが、借りる側にはまったくわかりません。管理は、ＰＣの中できちんとされているそうです。

嘱託と臨時職員の方２名が配置されています。徐々に、先生方からの依頼で資料を集めることが多くなってきているそうですが、「バックには市立図書館のネットワークがあるので、迅速に対応できる」というお話でした。

富山市立芝園小学校・中学校

　富山市で初の小中一貫的連携教育を目指し、その一体型校舎がＰＦＩ手法で建設され、平成２０年４月より使用が開始されています。それに伴い、小学校棟と中学校棟をつなぐ場所に、新しい学校図書館が誕生しました。
　一貫的連携教育は開校後１年を経ていない状況では、まだまだ模索中ということでした。そのなかで学校図書館が各校舎をつなぐ渡り廊下に沿って設置されていることや、蔵書が分離された形で配置されているものの、オープンスペースに愉しく配架されているため、学校内でいち早く小学生と中学生が交流できる場を作っているそうです。図書館の基本的サービスである「憩いの場所の提供」という性質が、功を奏しているようです。学校図書館の存在価値を改めて感じることができました。

富山市立中央小学校

　３つの小学校が統合され、芝園小中学校と同じく平成２０年にＰＦＩ方式で建設されました。校長先生が「子どもたちが特に気に入っている部屋は図書室です」と言われるように、図書館内には愉しくて暖かい雰囲気を大切にしたレイアウトが随所に見られました。

また、本に親しむ子どもたちを育てようと、学校のアクションプランのひとつに読書量を据えた結果、昨年の２学期末までに総読書冊数が２６、３５０冊、一人平均約６７冊、１ヶ月平均７，４冊という驚くべき数値になって現れたそうです。（ちなみに文科省の平成１０～１２年度学校図書館情報化・活性化推進モデル地域事業指定地域の小学校の読書量は１ヶ月６，６冊です。）

また学年ごとにある共有スペースのテーブルには、その時々の学習に関連する本が展示され、学校図書館による授業への支援も活発に行われています。

芝園小・中学校には、小中２校兼務という形ながらも専任の職員がいます。中央小学校には、統合の際の特例として、１校専任の職員がいます。憩いの場所の創出や学校の教育計画に組み込まれて成果をあげる学校図書館を作るには、やはり毎日勤務する学校司書の存在が不可欠だと改めて思いました。

ところが、今年度の中央小学校では特例が外されて、学校司書の勤務日が週３日に減ってしまいました。実績を上げてきた様々なサービスは、縮小せざるを得ないでしょう。司書が毎日いる図書室を体験した子どもたちが、誰もいない日をどのように感じているのかも心配です。けれどもこれは、市町村合併後、司書の勤務日数を学校規模で定められたため、旧町のたくさんの学校でも出た状態です。いつまで、このような不誠実な環境を子どもたちに提供していかなければならないのでしょうか、とても残念です。関係各位に、早急に真剣な検討をお願いしたいと思います。